

# 西安寺跡第10次発掘調査 現地見学会資料

2020.12.13. 奈良県王寺町地域交流課



写真1 西安寺跡のある舟戸神社周辺（南上空から）



写真2 塔基壇と回廊？の検出状況（北から）



写真3 塔南面の乱石積基壇外装検出状況（南から）

## 1 はじめに

西安寺跡は王寺町舟戸2丁目の舟戸神社周辺にあります。すぐ北側には大和川が流れ、同じく大和川沿岸の斑鳩・片岡地域には法隆寺をはじめ、中宮寺跡、法起寺、法輪寺、平隆寺、長林寺、片岡王寺跡（放光寺）、尼寺廃寺跡と数多くの飛鳥時代寺院が所在しています。王寺町では西安寺跡の保存・活用を目指して、平成26年度から毎年度、発掘調査を継続しています。

## 2 調査の経過

西安寺跡ではこれまで9次にわたる調査を行い、次のようなことがわかっています。

- ・拜殿の北東に塔が位置し、乱石積の外装をもつ13.35m四方の基壇に、3間等間で6.75m四方の建物が建ち、7世紀末から8世紀初頭頃に建立されたこと
- ・塔の北側に金堂が位置し、乱石積の外装をもつ東西14.07m、南北12.18mの基壇に、東西（桁行）5間、南北（梁行）4間の建物が建っていたこと
- ・西安寺は南向きの四天王寺式伽藍配置であると考えられること
- ・金堂の東に上端幅4.76mの基壇をもつ東回廊があり、その内外に雨落溝がつけられていたこと
- ・金堂の北は基壇をとまなう講堂はないが、7世紀後半頃に版築状に層を重ねて整地されたこと

以上のことから、今回の第10次発掘調査は、まだ確認できていない南回廊や西回廊、中門の有無を確認するために、令和2年11月9日から実施しています。

## 3 調査の成果

2区トレンチ 南回廊または中門の有無を確認するために、塔基壇の南端付近から南方向を発掘しました。

塔基壇では、自然石を積み上げて化粧する乱石積の基壇外装が良好な状態で検出できました。下端から4段分は花崗岩を使っていますが、上端の葛石（かずらいし）に当たる部分は二上山で産出される凝灰岩を並べています。基壇の高さは1.09mです。

塔の基壇外装から南へ5.5mのところ、幅1.1m、深さ30cmの溝を、さらにその南側では溝底から48cmの高さをもつ基壇状の高まりを検出しました。

この高まりは2区トレンチ内を超えて南に延びていますが、3次調査トレンチの位置までは延びないことがわかっています。したがって、この高まりは南回廊である可能性が高いといえます。南回廊と推測される基壇は、地山を削り出したのちに15cmの厚さで盛土をして築かれています。ただし、南回廊の高まりが中門に当たることも考えられますが、塔南面基壇から階段が検出されなかったことからすると、南が正面でなく、門はなかったと想定できます。

1区トレンチ 東回廊から伽藍中軸線で折り返し、西回廊が想定される位置にトレンチを設定しました。西安寺は南向きの四天王寺式伽藍配置であったと考えられていますが、地形を見ると南には丘陵があり、空間が狭くなっています。そこで、中門は南ではなく、西にあったことも想定して発掘しました。

その結果、干割れした痕跡のある地山が確認でき、地山の上にわずかに整地された層のあることがわかりましたが、西回廊や中門に当たるような遺構は認められませんでした。舟戸神社の境内の西隣は、一段下がる地形にあるため、想定される西回廊がさらに西に延びる可能性が低いことから考えると、本来あった西回廊の遺構がすでに削平されて、なくなっているのではないかと想像されます。

## 4 まとめ

今回の第10次調査によって、塔基壇の乱石積基壇外装は全面にわたって非常に状態良く残されていることがわかりました。この貴重な遺構を将来的にどのように保存し、どのように活用していくのかをしっかりと検討していく必要があります。

また、伽藍配置に関しては、南に中門があった可能性もまだ残されていますが、南が回廊ならば中門は西にあった可能性が高くなり、引き続き調査して確認する必要があります。

あるいは、西安寺は難波と大和を結ぶ交通路である大和川に近接した寺院であるため、仏教的には考えにくいことですが、大和川に面した北に門が開いていた可能性もあります。現在の舟戸神社も北向きであることが、それを示唆しているかもしれません。





図1 大和川周辺の寺院遺跡 (1/50,000)  
(下図) 国土地理院発行

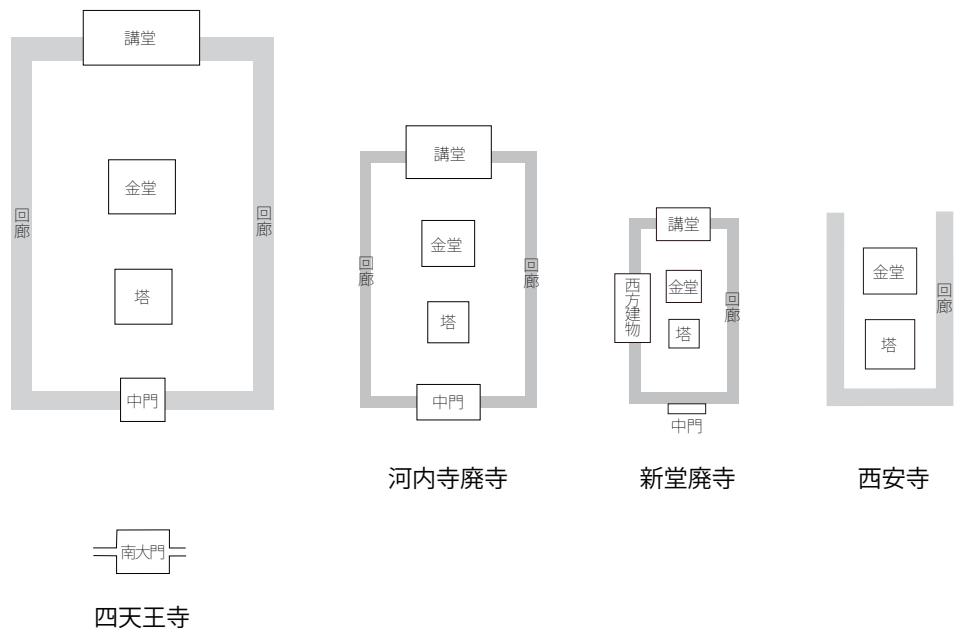


図4 四天王寺式伽藍配置の規模の比較 (1/2000)

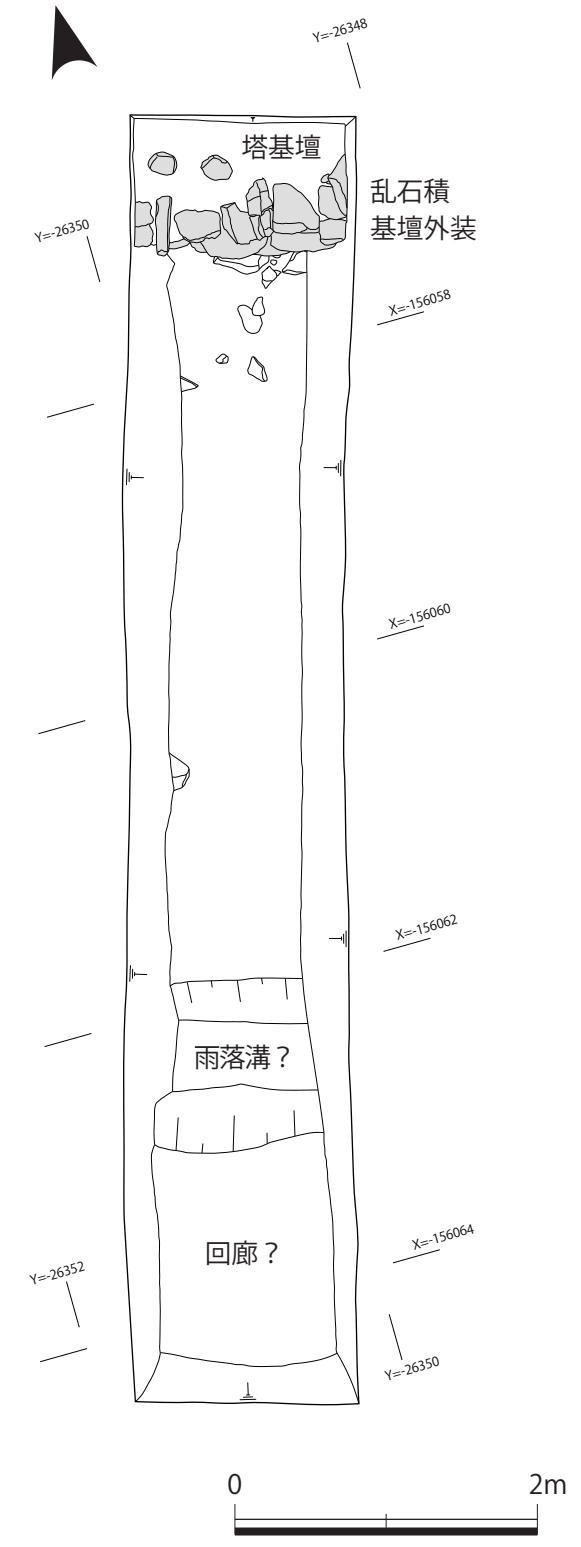


図2 2区トレンチ平面図 (1/50)



図3 西安寺の伽藍推定図 (1/500)